2025年5月11日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

モロッコ
才野恵さん(36)
呉市出身

対話通した学び 伝える

日本から遠く1万キロ以上も離れた国、モロッコ。15年前に観光で訪れたこの国に、再び来るなんて思いもしなかった。

私が現在、国際協力機構（JICA）の海外協力隊員として派遣され、暮らしているのは中部に位置する街ベニメラルである。4千メートル級を含むアトラス山脈に近く、夏は50度近くまで気温が上がるこの地で、主に小学校の算数科指導法に関する授業を教員養成学校の学生に行っている。

モロッコ人はコミュニケーションの達人だ。乗り合い制のタクシーでは、初めて出会った人同士でも会話が止まらない。実に感情表現が豊かで、言葉を超えたコミュニケーション力に初めは圧倒されたものだ。

一方で、教育現場では教師が一方的に指導することが多く、子ども同士の対話が少ないように感じた。そこで私は、日本で実践されている〝対話を通した学び〟を、教師を目指す学生たちに伝えることにした。すると授業のたびに、学んだ内容や日本の教育について学生から熱心な質問が来るようになった。彼らの学びに対する意欲に感心させられる毎日だ。

算数科の他に、図工や英語での歌・振り付けなどのアクティビティーの授業も担当している。切り絵の授業では、説明が終わる前に作業を始めたり、はさみがうまく使えなかったりしながらも、まるで子どものように夢中で取り組んでいる。

完成させた切り絵を掲げて喜ぶ教員養成学校の学生

ようやく出来上がった作品をうれしそうに見せ合う姿に、私も自然と笑顔になった。授業後には、ある学生が「時には失敗から得られる学びもあり、友達と対話をしていく中でより良い方法が見つかった」と話してくれた。

活動を始めてまだ4カ月ではあるが、彼らの中で、〝学び〟の捉え方が少しずつ変化しているように感じている。それ以上に、言語、習慣など背景の文化が異なる私から、少しでも学びたいと思ってくれることが、何よりうれしくてたまらない。彼らが教員となり、子どもたちの前に立つ時、私の活動が少しでも生かされたらと、心から願っている。